

指導者（保護者）として大切にしたいこと（その34）

～「指導者と選手の絆」～

2022年1月吉日

U12部会広島地区SV 大庭浩資

広島県バスケットボール協会U12部会広島地区の保護者の皆様、指導者の皆様、役員の皆様、いつもお世話になっております。

2022年が始まりました。

昨年末から広島市やその周辺においても、コロナウイルス感染者が、じわりじわりと増えてきています。今のところは、練習や試合の自粛には至っておりませんが、このコラムが掲載される頃には、状況が大きく変わっているかもしれません。

いずれにしても選手の健康を第一に、今後は今まで以上、コロナウイルス感染対策を十分にとりながらの活動を進めていくことが大切です。

6年生の皆さんは、小学校生活も残り3か月足らずとなりました。これまで長い間、暑い夏も寒い冬も、ともに活動して生きた同級生、後輩たちとバスケットボールができるのもあとわずかです。ましてやこのコロナ禍の中で、残りの活動そのものも保障されているとは言えません。

だからこそ、残された小学校生活が悔いのないよう、またたくさんの良い思い出ができるように、一日一日を大切に過ごしてほしいと思います。

さて年末から年始にかけて、いろいろなスポーツが行われ、おそらく皆様もテレビ等で観戦される機会も多かったことと思います。私もテレビに釘付けで多くの感動を覚えました。そしてスポーツの素晴らしさを改めて感じることができました。

そんな中で、今回は「指導者と選手の絆」というテーマで、新聞記事を参考に私の所見を述べてみたいと思います。

最初は、スポーツから離れますが、将棋界の話です。

＜愛情たっぷりのお年玉＞

将棋の藤井聡太四冠（19）が1月3日、師匠の杉本昌隆八段一門の指し初め会に参加し、師匠から成人前の“最後のお年玉”を受け取り、笑顔を見せました。

杉本師匠は、お年玉を未成年の弟子やプロになる前の弟子に渡すと決めていて、今年20歳になる藤井四冠へのお年玉は“最後”になりました。

杉本八段は「藤井四冠が小学4年生で弟子入りしてから、これまで10年間、毎年お年玉を渡しましたが、『竜王』に渡せたというのは感慨深いです。ここまで早い成長は予想していませんでした」と話していました。

また、渡したお年玉の金額について尋ねると「金額は内緒ですが、去年は2つのタイトルが増えたので、その分を増やしました」と去年のお年玉より増額したことを明らかにしました。

師匠からの愛情のこもった温かいお年玉に藤井四冠は「ありがとうございます」と応じ、笑顔を見せていました。

お年玉を受け取る時の、あの目を細めた照れ笑いをする藤井四冠の姿が目には浮かびませんか？

藤井四冠の2021年の獲得賞金・対局料は、1月に加算される竜王戦のタイトル料を合わせると1億円を超える見通しです。

そんな藤井四冠でも、師匠からの“お年玉”は金額など関係のない、**愛情たっぷりのかけがえのない宝物**でしょう。

また杉本師匠にとっても、師匠冥利に尽きるとはこのことでしょう。

「青は藍より出でて、藍より青し」

教える者と教わるものが、互いをリスペクトする。互いに感謝する。本当に素晴らしいことだと思います。

次からは「第98回箱根駅伝」の記事です。

視聴率30%を超える冬の風物詩としてすっかり定着した箱根駅伝ですが、今年は、青山学院大学の圧倒的勝利で終わりました。

新記録が誕生する一方で、優勝争いの興味は薄れ、大きな波乱ありませんでしたが、なぜ多くの人がテレビにくぎ付けになったのでしょうか。

その魅力は、ある人によると「200キロ超もの距離を、たった10人でひたすらタスキをつなぐ。仲間やOBたちの思いを背負って走る。だから自分の力以上のものが出せるし、気負って失敗もする。そして日本人が好むといわれる責任感、連帯感、信頼感のすべてが詰まっている」とのことです。

<なぜ、スーパー1年生を起用しなかった？>

東洋大学は苦しいレースを強いられる中、総合4位となり、17大会連続でシード権を獲得した。

出場が期待された石田洸介（1年）の出番はこの日もなかった。

出雲駅伝、全日本大学駅伝で区間賞に輝いた逸材の、箱根デビューを見送った理由を酒井監督は「できれば4区に起用したいと思っていたが、直前の練習で調子が上がらなくて。走れなくはなかったが、本来のパフォーマンスが出せる状態じゃなかった。それなら他の選手ということで。注目選手なだけに中途半端な状態じゃ出せなかった」と説明。

選手がけがをしていたり、調子が悪かったりした時に、その選手を試合に出すかどうかの判断は、指導者としてとても難しいですね。試合での勝敗を優先するのか、それともその選手の今後や将来を考えて見送るのか。その時の選手やチームの状況、チームの方針などがあり、答えは簡単には見つかりません。

石田選手はもちろんこと、監督もチームメートも悔しかったことと思いますが、**この監督の判断が選手と監督との絆をより一層深め、一回りも二回りも大きく成長した選手、チームになることを願うばかりです。**

<先生から生徒へのタスキリレー実現>

初出場の駿河台大学が、4区から5区の小田原中継所で“先生と生徒のタスキリレー”を実現させた。

中学教師を休職している、31歳の今井隆生（4年）が4区を走り、5区にはかつての教え子の永井竜二（3年）が待っていた。タスキをつなぐと、法大

時代に「爆走王」として話題を集めた、徳本一善監督（42歳）に「ありがとう」とねぎらわれ、涙を流して崩れ落ちた。

走り終えた今井は「前日も永井と頑張ろうと話していた。誰もができることではない。永井と僕を結んでくれた監督にも本当に感謝しています」と、かみしめるように話した。

箱根駅伝出場を夢見て埼玉県の中予体育教師を退職。20年に駿河台大3年に編入した。永井は駆け出しの教師時代の教え子。避けたかった最下位に転落したが、徳本監督からはレース中に「謝ってきたらぶっ飛ばすぞ。全部起用したオレの責任。お前に今できることは何だ。死ぬ気で腕を振れ」と、ゲキを受けた。走り終えると涙腺が崩壊した。

夢を追う今井を、かねて永井は「姿勢や取り組み、全て箱根駅伝を第一に考えていた」と尊敬しており、結果に不満などあるはずもなかった。

4月から復職する今井の人生を懸けた挑戦は、大学に新たな歴史を、後輩に勇気をもたらした。

箱根駅伝で、自分のタスキを教え子に渡すなんて、夢のような話ですね。

この先生も教え子も、自分の夢を実現するために、互いに励まし合いながら、相当な努力をしたことに対して疑う余地はありません。この二人と大学の監督の心温まる師弟関係は、本当にうらやましい限りです。

一方で、この先生には奥様も子供さんもいらっしゃいます。退職中の収入は一切ありません。夢を叶えるためとは言え、家族の助けなしにはこのようなことは実現しません。

ミニバスの選手の皆さんも、「**コーチや保護者の皆様を始め、多くの方々のおかげでバスケットボールを楽しむことができる**」という、感謝の気持ちをいつまでも持ち続けてほしいと思います。

<監督を超えました!!>

駒沢大学の田沢廉（3年）が、「花の2区」で学生最強を証明した。駒大の選手が2区で区間賞を獲得するのは、36年ぶり。

激走を終えて道路に倒れ込んだ田沢が、むくっと起き上がった。右手を上げて頭を下げた先は、大八木監督が乗る運営管理車。「ごくろうさん！ ありがとう！」聞きなれた張りのある声が昨年よりも胸にしみた。

中学生の時からあこがれた駒大で、田沢はめきめきと成長を遂げた。「世界と戦いたいです」。熱意を伝えると、大八木監督は「俺もだ」と同じ熱量で応えてくれた。

箱根路へ向かう3日前のこと。「俺、取ったんだ〜」。指揮官はさりげなく自身の栄冠を話題に出した。「じゃあ、その座は取らないでおきますよ」。どこか誇らしげな様子に、田沢は冗談交じりに応戦。

36年前、区間賞を獲得したのは、現役時代の大八木監督。

「それ以来ということは知らなかった。うれしいです」。師弟の間に記録のタスキが繋がった。

選手に「ごくろうさん。ありがとう」と言える監督さんも立派だと思いますし、監督の指導方針を信じて成長した選手も立派だと思います。

コーチは選手のために指導方法の工夫改善を怠らず、また選手はコーチを信じて努力を重ねる。そこに、指導者と選手の強い絆が生まれるのでしょう。

<これを食って次勝て！！>

4区で青山学院大学の主将、飯田貴之（4年）が11月の全日本駅伝の借りを返す好走を見せた。タスキを受け取った時点で、2位東京国際大との差はわずか12秒。その差を1分37秒に広げ、往路優勝を引き寄せた。

「迷わず攻める」。そう決めたのは苦い経験からだ。全日本でアンカーを務めたが、駒大に8秒差で競り負け、優勝を逃した。「間違いなく、これまでの人生で一番悔しかった経験」と振り返る。ゴール直後は号泣。「勝手に主将の重圧を感じてしまっていた」と落ち込んだ。

原監督から「これを食って次勝て」と、東京に戻る新幹線の車中でカツサンドを渡され、「迷ったら攻めろ」とアドバイスされた。

その後、「陸上に一番時間をかけてきた自信はある」と言い切るほど、万全の準備を進め、今回の走りに繋げた。

今も全日本の映像を見られない。「最高の形で終わることができれば、全日本の経験があるから、今があると言えると思う。そうなれば、あの時の映像を見返せるようになると思う」。それを実現するような執念の走りであった。

余談ですが、私が指導しているチームは「小さなカップ戦で優勝しマックでお祝い」が合言葉になっています。それでもなかなか優勝できません。やはり優勝するためにはマックではなく、カツサンドくらい奮発しないといけないのですね（笑）。

だれでも失敗はあります。特に、バスケットボールは失敗のスポーツとも言われます。選手が失敗した時に、コーチとしてどのような言葉かけを行えばよいのでしょうか。

叱咤激励の言葉も時代とともに変わってきています。

同じ言葉を発しても、コーチと選手の信頼関係があれば効果的ですし、信頼関係ができていなければ逆効果になるだけかもしれません。

やはり、選手もコーチも、また保護者も互いにリスペクトの気持ち、感謝の気持ちを持つことが大切でしょう。

<終わりに>

青山学院大学の原晋監督は、箱根駅伝で優勝した次の日から、いろいろなテレビ番組に出演されていました。おそらく皆さんもテレビで見られたことでしょう。

そこでは、自身の指導方針や育成法「青山メソッド」、また選手の頑張りについて話されていましたが、私が特に印象に残った言葉は、次の二つです。

「昭和の時代の練習をしては、今の選手はついてきません。また伸びません。今の時代に合った指導ができるように、コーチ自らが変わり、勉強することが大切です。」

「これまで選手を大切に育ててくださった、高等学校陸上部の先生方、本当にありがとうございました。先生方のおかげで、選手の今があります。」

日本一の監督さんですら、これまでの指導者や指導に感謝する。逆に言えば、常に謙虚で自ら学ぶことを怠らず、周りの人への感謝の気持ちを持たれているから日本一の監督さんなのかもしれません。